

氏名： 伊藤 恵子

実施国： タンザニア連合共和国

協力活動

活動名称 タンザニアの農村部の中学校に通う生徒への継続的な性教育の普及活動

実施期間 2019年2月～2019年11月（延長申請し、中間報告提出済み）

## (1) 申請した動機

申請者は JICA ボランティアの青少年活動隊員として 2013 年 7 月から 2016 年 3 月までの間、プワニ州ムクランガ県のムクランガ県庁中等教育課において、学校保健活動の推進、啓発活動に従事していた。中でも一番力を入れた活動が、任地で問題となっていた若年妊娠を減らすための性教育活動であった。離任前には教員にトレーニングを行うことで、ボランティアがいなくなったとも現地において性教育が継続的に行われるような技術移転活動を行っていた。

帰国して、大学院で学びを深める中で、再びタンザニアでの思春期性教育活動に関わることができないか探っていた際、指導教官のフィールド（タンガ州コログウェ県）においても同様に若年妊娠が問題となっていることを知った。指導教官が所属する日本の NPO(Class for everyone) がパートナーを組む現地 NPO(子ども教育を専門とする New Rural Children Foundation) のスタッフと協力しながら、若年妊娠などの問題解決のために継続的な性教育活動が現地に根付くよう、隊員時代の経験を生かして活動していきたいと考え、本プログラムに申請した。

## (2) 活動内容概要

(第一回目渡航 2019.03.06～04.10 )

当初の予定では第一回目の渡航を 8 月頃の予定としていたが、学業の都合もあり、渡航が 3 月にずれ込んでしまったこともあって、申請者が活動地に到着した際には、すでに現地の NPO スタッフが、寸劇などを交えた性教育プログラムを開始している状況であった。

NPO スタッフが県内の全ての学校を巡回するには、予算等の関係で困難があった。このような状況を少しでも解決するために、以下 3 点の理由から Peer education を用いた性教育を行ってみることを提案した。

- ① 生徒が生徒に教えていくため、継続性が見込める
- ② コストがあまりかからない
- ③ 生徒同士年齢も近いため、大人が教えるよりもより身近な存在で互いに情報共有・話し合うことができ、学んだことをより自然に捉えることができる

まず初めに NPO の活動に協力しているスタッフ（助産師）とともに、Peer educator 向けに最低限どのようなことを知っていてほしいかというガイドラインを作成した。その後、県内には 30 校近い中学校が存在したため、パイロット校として、町の中心部付近にある中学校 3 校と、少し田舎にある中学校 3 校を選び、Peer education による性教育を開始してみることとした。訪問時、校長ならびに担当教員にプログラムの説明を行い、まず Peer educator を学校規模に応じて各学年 5-10 名程度選出してもらった。その後、申請者ならびに NPO スタッフが、Peer educator に向けて、事前に作成したガイドラインをもとに 1 時間程度の説明を行った。生徒からも多くの質問が寄せられ、この地域の中学生が感じている性に対する疑問や質問を再認識する場となった。終了後は生徒たちに対して、友人や家族に今日の学びを個別に話したり、あるいは教員と相談して、午後の余暇の時間を使用してみんなで授業をしてみるように話をした。

約 1 週間後を目途に、再度学校を訪問し、フォローアップを行った。テスト等学校行事の関係で、フォローアップは 6 校中 4 校のみ実施した。そのうち 1 校では、実際に Peer educator が全校生徒の前で授業をしている場面も見学することができ、Peer educator たちは生徒から寄せられる疑問に的確に答えていた。Peer educator たちとは今の段階で困難に感じていることはないか、負担に思っていないか、周りの生徒の様子はどうかなど、今後も活動が行っていきける状況であるのかについて、生徒たちとディスカッションを行った。

(第2回目渡航：2019.10.07～11.13)

第2回目の渡航も本来であれば6月を予定していたのだが、第1回目の渡航が遅れたことに加え、学業の都合もあり、渡航時期が遅れてしまった。しかし、一方で前回の渡航から半年という十分な時間が経過しており、生徒たちが活動を継続してくれている様子が十分伺えたことは良かった。

今回の渡航では、そもそも活動が継続されているのか、生徒たちがどのようにPeer educatorの活動を継続していたのか、さらには、Peer educatorによって性教育を受けた生徒たちにも話を聞く機会を設けた。対象校6校すべてにおいて、より話しやすい環境を作るために男女別にPeer educatorならびにその他の生徒とディスカッションを行った。

生徒たちの意見として、自分たちだけで活動をしていくには限界がある、学校の先生にもっと協力してほしい、という意見が聞かれたため、Peer education活動に従事してくれる先生に対して、生徒の意見を伝えると同時に、今後のさらなる協力を依頼した。

さらに、子どもたちから聞かれた意見を、今後の活動に少しでも反映できるように、日本のNPO(Class for everyone)のスタッフにフィードバックした。

### (3) 活動の成果・苦労した点・反省点等

苦労した点に関して敢えて記載すると、最初の3月の渡航時は初めて訪ねる場所ということで、若年妊娠の状況やそのほか性に関して問題になっていることをまず的確に把握するところから始めなければならなかったこと、また、一緒に働くNPOスタッフや学校の先生方などに受け入れてもらえるよう人間関係の構築に十分留意する必要があったことである。

Peer educationによる性教育自体は、実現可能性も継続性も高いということで、学校側にもNPOスタッフにも好意的に受け入れられたことは良かったと考えている。Peer educatorの負担にならないかどうかが個人的に少し気になっていたのだが、インタビューの中で、この役割が与えられてうれしく思うと答えてくれた生徒が大多数であったことも良かったと考えている。Peer educatorとして活動することで、今まで人前で話すのはあまり得意ではなかったが、自身がついたと答えている生徒もおり、生徒の心理的変化にもプラスに結びついていたことも良かったと考える。

2回目の渡航時は、11月に国家試験が控えていたことから、学校から訪問許可を得ることが若干困難だった。インタビューは、生徒の思いを十分に聞く目的があったため、ある程度まとまった時間が欲しかったが、その旨学校側にお問い合わせすると、授業との関係で難しいから20分の休み時間なら大丈夫、といった回答が返ってきたこともあった。

さらに、小雨期のはずが今年は例年以上に降水量が多く、道路が冠水し、学校への訪問が困難となってしまったこともあった。学業との関係で仕方ない面もあったのだが、渡航時期に関しては、相手国の学校行事の事情ならびに気候に関しても考慮してスケジュールリングすることが望ましかったと反省している。

### (4) 今後のプラン

今回活動させていただいたコログウェ県では、日本と現地のNPOの相互協力のもと、現在小学校を中心に性教育が実施されている。性に関する知識を持ち、問題を避け、自分の身を守り、将来の目標を達成するために正しい判断、行動ができるよう、早い段階から性教育を学校のプログラムの一環に取り組んでいくことは望ましいことである。しかし、実際に思春期真只中の中学生に対する性教育もやはり必要なのではないかと考える。生徒との話し合いにおいても、親や先生と話すよりも、友達だから話しやすい、実際に自分たちの身の回りで起きうる問題について再認識できた、などといった、中学校での性教育に関する肯定的な意見が大半であった。

今後は日本のNPOであるClass for everyoneと協力をいながら、性教育を小学校のみならず中学校でも実施していくことができるように、また、Peer educationの手法を可能であれば小学校でも取り入れていくことができないか、話し合っていきたいと考えている。